源氏物語にあらはれた
「――奉る」と「――聞ゆ」

伊藤和子

源氏物語に、客語を尊敬する補助動詞として、「奉る」「聞ゆ」の二語が現れる。この二語は、全く同様の用法で區別がないのであらうか。源氏物語に於いては、この二語は大體區別して用ひられてゐる様である。「奉る」は、動作を現す動詞に接續して、説明的な地の文や、公だつた男の物いひに多く用ひられ、「聞ゆ」は、心情の表現に關する動詞に接續して、女の物いひに多く用ひられたやうである。本稿に於いて、源氏物語に至るまでの、二三の物語に現れた「奉る」「聞ゆ」兩補助動詞の徑路を辿り、併せて、源氏物語の文章の表現效果に、この二語がどんな役割を演じてゐるかを考へてみた。

源氏物語といふこの上なく美しい織物が、どんな系で織られ、それが如何に織りなされてゐるかといふ、この表現效果を考へる事が私の目的であるが、果してその目的に少しでも近づいてゐるかどうか。

源氏物語、桐壺の巻の

野分だちて、俄に膚寒き夕暮の程、常よりも思し出づる事多くて、靱負の命婦といふを遣はす

に始まる、桐壺更衣の里の場の一節は、當帝の御使といふ、華やかなきらびやかな宮廷の匂ひと、涙にしづむ更衣の母のわび住居の様子が、心も吹き通る野分の風に錯綜した、非常にすぐれた情景の一つである。

こゝで、帝の御文への返事として、更衣の母が、使者靱負の命婦にいふ詞

命長さの、いと辛う思う給へ知らるゝに、松の思はむ事だに、恥かしう思う給へ侍れば、百敷に行き交ひ侍らむ事は、ましていと憚り多くなむ。長き仰せ言を度々承りながら、自らはえなむ思ひ給へ立つまじき。若宮は、如何に思ほし知るにか、參り給はむ事をのみなむ思し急ぐめ

れば、理に悲しう見奉り侍るなど、内々に思ひ給ふる様を奏し給へ。ゆゝしき身に侍れば、かくておはしますも、忌々しう忝く、

に、「思ひ給ふる」といふ、自卑の言葉が、つゞいて四つも現れ、而も始めの言ひ出しは、殊にゆつくりと、屈折した重々しい言ひ方である。これは、聽手の背後にある、みかどを意識しての母のへり下つた姿と、悲しみにたゆたふ心情の表現として、かやうな裝飾的な長い言廻しを必要としたのだと思はれる。が更に、「思ほし知る」の「思ほす」は、下にある「思し急ぐ」に、變化をつけたものと思はれるが、「思ほす」といふ形は、地の文にはない形であり、而も相當高貴の人に限つたやうであつて、孫としてよりも、帝の御子としての若君への敬意と、全體の莊重な調子への寄與として、適切な表現と思はれる。又、最後の、「……忌々しう忝く」と、言ひさした省略の形も、帝への敬意と、自己の悲しみの表現がよく現れてゐると思はれる。

かやうに、内容と形式の合致といふ事は、源氏物語に於いて至る處に見出されるのであつて、言葉と言葉の組合せにも一語一語の重さを考へて、全體の構圖に最も適した表現が考へ出されてゐる、と思はれるのである。そして、かやうな表現が成就したのは、紫式部の高度な感性のたまものであらうが、又かやうな表現の重みをかみしめる事が出來た當時の讀者であつた故ではなかつたらうか。

今、源氏物語に於いて、「奉る」「聞ゆ」といふ二つの謙讓の補助動詞があらはれる。

① 御息所は答も聞え給はねば、御方、對に渡し聞え給ひつと聞え給ふ。（若菜上196 6）

② あなたにこの宮を領じ奉りて、ふところを更に放たず持て扱ひつゝ、人やりならず衣も皆濡して脱ぎ更へ勝なめる。輕々しく、など斯く渡し奉り給ふ。（若菜上196 7）

と表現される時、どちらも上にくる動詞「渡す」の客語である、「明石姫君」に對する、謙讓語である事に變りはなく、兩語の間には何らの差別もないやうである。

併し、あれだけ一語一語に微妙なニュアンスを感じとつた平安朝の人々なのである。そして、謙讓動語としての、「聞ゆ」[注一]がこの期に發生して、更にこの動詞「聞ゆ」から、「――聞ゆ」といふ、謙讓の補助動詞が派生した事を考へるならば、「――聞ゆ」は、「――奉る」では、表現出來ない或る感じを現す爲に創られた謙讓の補助動詞なのであつて、この兩語の間には大きなニュアンスの相違があつたのではなからうか。

源氏物語を作つてゐる一語一語の重さをはかる事によつて、源氏物語の織り出してゐる文様を、少しでも鮮明に見究める爲の、一つの手懸りとして、この兩語の差別を考へてみたいと思ふ。

註1　「對に渡し聞え給ひつ」と聞え給ふ。（若菜上196 6）
　　等、「申上げる」の意を持つ謙讓の動詞、

一

かう考へて、もう一度さき程の「渡し聞ゆ」と、「渡し奉る」を眺めてみる事にする。

①は、御方、即ち、明石の上といふ女性の詞であり、②は、男性、光源氏の詞である。又①の「聞ゆ」といふ謙讓語は、②の「――奉る」と共に、明石の姫君に對して付したものであるが、この時、姫君は未だ小さく（源氏物語では、高貴な生れの方でも、赤ン坊には敬語を付してゐない様である）[註1] 話手明石の上とは親子の關係である。即ち、①に於いては、「渡す」の主體「對の上」とは、紫の上の事であり、話手は客語である明石の姫の生みの母である、明石の上なのであつて、而も、聞手は、光源氏である。この四人のもつ關係の把握が、明石の上をして、生みの子、明石の姫君を語るに當つて、「――聞ゆ」と表現せしめたのではなからうか。

そして、動詞＋謙讓の補助動詞といふ接續を考へてみる時、「渡し＋聞ゆ」といふ接續の仕方は、源氏物語中、二、三例なのであつて、他は凡て「奉る」に接續する「渡し＋奉る」なのである。即ち、①の、「渡し聞ゆ」は、稀な表現方法の一つといふ事が出來る。そして、この「渡し聞ゆ」の少ない一例としての、

大宮の御方に、内の大臣參り給ひて、姫君渡し聞え給ひて、御琴など彈かせ奉り給ふ（乙女　165 2）

……と聞え給ひて、俄に渡し聞え給ふ。（乙女　172 -2）

は、共に地の文ではあるが、頭中將→雲井雁といふ親子の關係であり、當時まだ雲井雁は、夕霧夫人ではない、いはゞ部屋住みの身分である。

爰に於いて、補助動詞「――聞ゆ」「――奉る」には、上にくる、即ち補助される動詞に、大體の差別があつて、若しもこれに例外が生じる時には、この兩語のもつニュアンスの差別をよく考へての上の、場面效果のための、例外であるとは考へられないであらうか。

先づ、謙譲の補助動詞、「――奉る」「――聞ゆ」では、上にくる動詞に差別がありはしないか、といふ事を考へてみる事にする。この事については、既に、日本文學論究、第十冊に於いて、和田利政氏が、「源氏物語の謙遜語補助動詞『奉る』と『聞ゆ』について」といふ論文に詳述していられる。氏の調査によると、「――奉る」の上にくる動詞は、「見奉る」「入れ奉る」の如く、その意味が動作に關聯した動詞、「領じ奉る」の如く、漢語系統の動詞、サ變の動詞、及び、「る」「らる」「す」「さす」の、受身及び使役の助動詞であつて、これらの動詞及び助動詞の次にくるものは、「――奉る」であるとされてゐる。そして、「――聞ゆ」の接續するのは、「思ひ聞ゆ」「戀ひ聞ゆ」の如く、心のはたらきを表現する語及び、「いとほしがり聞ゆ」の如く「――がり」のつく動詞とされてゐる。この結果は、私の調査と全く同一のものである。

それで、又改めてこの兩補助動詞の上にくる動詞の色分けを考へる必要はない事であるが、今一度、甚だ煩項ながら、源氏物語凡てにわたつて、「――奉る」のみに現れたもの、「――聞ゆ」のみに現れたもの、兩者に分つて、羅列してみる事にする。（勿論、その中には、例外もあるのであるが、これについては後に考へるとして、例外の數が甚だ少いものは凡て多い方に屬するものと考へる）[註2]

A 「――奉る」に現れるもの

見、見え

――せ、――させ、――れ、――られ

仕う（仕うまつる　といふ形）

始め

入れ、渡し、迎へ、返し、立て、

捉て、貶し、置き、かけ、寄せ、導き、言ひ、預け、送り、かくれ、加へ、

（爰までは、その頻度數が非常に多いが、例外もある。次に記すものは、現れた數は少いが、却つて例外は殆んどない）

をさめ、出し、捧げ、なし、――（漢語）し、別れ、似、据ゑ、上げ、着せ、聞き、領じ、養じ、取り、勘へ、率て、下し、持ち、覺え、得、

——おき、請じ、離れ、果し、設け、いつき、こめ、止め、起し、宿し、代へ、ふらかし、染め、かづけ、探り、難つけ、數へ、受け、見比べ、作り、つき、かなぐり、——たち、めくらはせ、引動かし、歩き等

「——聞ゆ」に現れるもの

思ひ、思ひ出で

戀ひ、愛で

放ち、馴れ、教へ

（爰までは非常に多い。その他は、）

訪らひ、思ひやり、語らひ、そそのかし、まつはし、扱ひ、ゆづり、慕ひ、語り、尋ね、賴み、恨み、喜び、むつび、訪れ、かくし、つくし、あへしらひ、試み、負け、知り、——しり、もよほし、挑み、數まへ、さざめき、破り、とがれ、賞め、笑ひ、心掛け、問ひ、並び、任せ、たぐへ、定め、恥ぢ、思ひ捨て、目さまし、まぎらはし、思ひなし、煩はし、思ひしめ、思ひ貶し、煩ひ、つくろひ、こしらへ、なづさひ、尋ね、おとなひ、弛め、にらみ、遁れ、返し、辿り、驚き、怖ぢ、なづらへ、爭ひ、うつくしみ、おしはかり、うけひき、悲しみ、仄めかし、誘ひ、逐らひ、從ひ、託ち、明らめ、育み、まねび、見さし、忍び、並び、近づき、勵まし、疎み、任せ、憚り、もどき、尊み、習ひ、たぐひ、思ひ寄り、まぜ、違へ、咳き、愼しみ、妬まし、制し、崇め、代り、ひそめ、弔ひ、告げ、差すぎ、引つれ、通ひ、惱み、思ひいたづき、うけひき、すゝめ、晴るかし、祝ひ、よみ、思ひまし、守り、もらし並び、集へ、仰ぎ、隔て、かすめ、いとひ、憎み、慰め、戯れ、守り、——守り、あばめ、いたづき、愁へ、强ひ、妨げ、はしたなめ、引違へ、歎き、咎め、赴り、通ひ、打つれ、否び、疑ひ、よそへ、——なやみ、まつれ、まつはれ、惜しみ、氣色ばみ、なびき、背き、たゆれ、しなし、去り、祈り、營み、過ち、聲づくり、親めき、つつみ、贈り、もてあそび、打絶え、引干し、劣り、あなづり、威し等

B

この調査によつてもわかるやうに、上にくる語の種類は、「——聞ゆ」の方が、はるかに豐富である。總計の使用數からいへば、餘り變りない事であらうが、それでも、「——聞ゆ」の方が多い樣である。

それから、「——奉る」の接續する方は、和田氏も言つてゐられる如く、漢語系統とか、「——れ」「——られ」とか、一應の分類が出來る

が、「聞ゆ」の方は、精神活動の表現に關するもの、とでも分類すべきであらうか、甚だとりとめのない、いろ〳〵の語を含んでゐる。複合語が比較的多く、動詞、形容詞に、ある接辭を伴つて出來た動詞（「悲しみ聞ゆ」「晴るかし聞ゆ」の如き）とか、「――奉る」の接續する語に比べ、動詞として、熟し方の淺い、王朝時代だけに存して、後には消えていつた言葉に多いやうである。これは何故であらうか。

この事を考へる上に於いて、「――聞ゆ」の創られた必要を考へてみたいと思ふ。そこで今、源氏物語に至るまでの假名物語として、爰に一應、伊勢物語、竹取物語、宇津保物語といふ線を引き、これらに「――奉る」と「――聞ゆ」とがどんなに現れたかを調べてみたいと思ふ。

註1 かくこそは、すぐれたる人の山口は著かりけれと、打笑みたる顔の何心なきが、愛敬づき匂ひたるを（松風177）

註2 例へば「思ひ聞ゆ」の如きは、源氏物語岩波文庫本一頁に、二、三例の割で出てゐるが、その中、「思ひ奉る」となるのは、唯の一例にすぎない。

二

一、伊勢物語

A 「――奉る」に現れるもの

仕う奉る　8例

拜み奉る　2例（共に八二段）

B 「――聞ゆ」に現れるもの

全然現れない。唯、謙讓動詞「聞ゆ」が、一二段、八二段と二ケ所現れる。

この期は、謙讓の動詞「聞ゆ」が、現れはじめた頃で、未だ補助動詞としては、用ひられず、又「――奉る」の方は、「仕うまつる」といつた、動詞＋補助動詞といふよりも、一語で動詞として認めてよいやうな慣習的ないひ方が大部分現れるのみである。

二、竹取物語

A 「――奉る」に現れるもの、

仕う奉る（仕うまつる）19例、　見奉る、6例、　養ひ奉る　4例、　入れ奉る　――せ奉る　3例、　――させ奉る　据ゑ奉る　捨て

奉る　送り奉る　2例、　婚ひ、逢ひ、求め、見つけ、返し、習ひ、思ひ　各1例、　計51例、

B　「――聞ゆ」に現れるもの

遊び、見つけ、迎へ　各1例、　計　3例、

（右の用例の中、新井信之氏の「竹取物語の研究」によると、

古本、　「――聞ゆ」なし、

田中大秀舊藏本、「迎へ聞ゆ」が「迎へきたらん」）

右の用例によると、「――聞ゆ」は、竹取物語には現れたやうであるが、これは、古本の如く、比較的信用のおける寫本には、現れてゐないのであり、而も「――奉る」の、51例に對して3例といふ僅少さである。而も、この3例とも、詞の部分に現れてゐる處から、この「――聞ゆ」は、口語性の強い言葉ではなかつたかと思はれる。

而もこの用例に現れた例をよくみると、「見つけ聞ゆ」は、「見つけ奉る」と「――奉る」の項にも現れてゐる。更に、「――奉る」の項に現れた「思ひ奉る」は、源氏物語に於いては、1例を除いてその夥しい例が凡て「思ひ聞ゆ」となり、「――聞ゆ」の項に屬する動詞として、代表的なものであつた。又、「――聞ゆ」に現れた他の2例、「遊び」「迎へ」も共に動作性の言葉である。即ち、竹取物語に於いては、「――奉る」も「――聞ゆ」もその接續する動詞には全然區別がないといふ事が出來る。

この現象は、むしろ反對に、次の如く考へられはしないだらうか。即ち、「――奉る」のつき得る動詞は、從來大體固定してゐて、「仕う奉る」の如く、その動詞自らが、下位者から上位者への敬意を現してゐるものや、「入れ」とか、「見る」の如く、動作性の、對象をはつきりと指向出來る、さういつた動詞にのみ接續するといふ暗默の約束があつた。それが、敬語意識の發達と共に、「思ひ」の如き、從來その必要のなかつた、精神活動の表現に參與してゐた動詞にまで、或る種の敬意を加へる爲に、謙讓の補助動詞をつける必要が生じ、それが「思ひ奉る」といふ形となつて現れたのではなからうか。今まで固定してゐた、「――奉る」の接續の範圍が擴がつたのだ、と考へたいのである。そして、それと同時に、口語に於いて、謙讓の動詞「聞ゆ」から、「――聞ゆ」といふ形が發生し、この語が、「――奉る」では表現出來ない微妙な敬意を現す謙讓の補助動詞として、文章語に入り込み、物語の對話の部分に現れたのではなからうか。

この期に於いては、「――奉る」「――聞ゆ」の差別は、未だこんとんとしてゐるが、そこに、來るべき、敬意の表現に關する驚くべき、感受性の萠芽をみたいのである。

三、宇津保物語

A 「――奉る」に現れたもの

1 詞に現れたもの

見奉る 86、――せ、60、――させ 10、教へ 10、見え 12、迎へ 9、渡し 8、習はし 7、思ひ 6、聞え 5、――れ 7、――られ 知り、始め、率て、抱き 4、忘れ、返し、求め、預け、入れ、据ゑ、持ち、3、送り、任せ、もとめ出、現はし、傾け、施し、放ち、叶へ、似、負け、し、見比べ、任せ、盡き、待ち、賴み、生し立て、訪ひ、見つけ、なし、恥ぢ、念じ、後れ、2、呼び、離れ、見合せ、――られ、果し、乞ひ、出だし、遣はせ、傳へ、醉はし、おこし、呪詛し、殺し、引き、聞き、つくし、勞り、止め、うち、見捨て、彈き、殘し、勝り、取り、許し、隱し、代り、待ちつけ、申し、從ひ、聞かせ、立て、おき、語らひ、かなぐり、留め、休め、逢ひ、見なれ、出だし、養ひ、恨み、宣ひ、不孝し、後見、勘じ、かしづき、生け、まつはし 1、

計 360例

2 地の文に現れたもの

――せ、45、始め、35、見 31、据ゑ 15、入れ 13、拜み、下し 8、抱き 5、着せ、返し、渡し、し、4、放ち、かづけ、拜し、臥せ、聞え、迎へ、習はし 3、配り、念じ、禮拜し、見え、待ち、つき、かゝり、くゝめ、あむし、添へ、おこし、美しがり 2、分ち、――させ、かしづき、待ちわび、送り、梳り、詣で、怨み、告げ、重ね、率て、請じ、申し、さし、見合せ、驚かし、待ちうけ、――れ、分け、なづき、磨き、うつし、かへ、呼び、やり、見比べ、かけ、賴み、思ひ、慰め、教へ、生み、別き、出で、むつれ、つぎ、さし、のせ、通はし 1

計 259例

B 「――聞ゆ」に現れるもの、

1 詞に現れたもの

思ひ 27、 賴み 14、 悅び 9、 語らひ 8、 畏まり 7、 たばかり 5、 否び、訪らひ 4、 尋ね、恨み、許し、讓り 3、 宣ひ、ゆづり、念じ、恥ぢ、そゝのかし、教へ、かしづき、隔て、知り、いらへ 2、 そしり、怖ぢ、かくし、答へ、なれ、うつろひ、後めたがり、慰め、謀り、語り、疑ひ、ほのめかし、誘ひ、なづらへ、制し、戒め、歎き、いぶかしがり、責め、惜しみ、いそがし、こしらへ、ほめ、見、見苦しがり、いとほしがり、戀ひ、見合せ、習はし 1、

計 144 例

2 地の文に現れたもの

恨み 5、 語らひ、思ひ 3、 怨じ、喜び、答へ、問ひ 2、 疑ひ、爭ひ、賴め、語り、つゝみ、珍しがり、畏まり、恥ぢ、睦れ、まねび、歎き、ゆかしがり、逃れ、ゆづり、避り、留め、訪ひ、見、制し、責め 1、

計 39 例

集計 802 例

宇津保物語になると、「――聞ゆ」の數は遙かに多くなつてゐる。併し、その比率は、源氏物語には、まだ〳〵及んでゐない。總數802例の中、「――奉る」は、619例、「――聞ゆ」は、183例である。これは、「――聞ゆ」は、口語性の強い、而も女性の言葉であつた關係から、漢文直譯系の文體で、男子の手になつたと考へられる、宇津保物語には、未だ大膽に、「――聞ゆ」の採用に至らなかつたと思はれる。

併し、當時既に、口頭語としての、「――聞ゆ」は廣く行はれて居り、文章語としても入りつゝあつた事が、この「――聞ゆ」の、擡頭として現れたのではなかつたらうか。勿論、宇津保の寫本は、凡てずつと後世のものしか、發見されてゐない現狀では、これは甚だ大膽な假說といふ事になる。

右に現れた、「――聞ゆ」の、詞 144、地、39例といふ、詞と地の文に於ける比率は、宇津保物語の作者が、地の文に於いて、嚴密な、登場人物に對する身分の使ひ分けを試みなかつた爲であらうが、詞の方は、口頭語の影響をうけて自然多くなつたのではなからうか。「――奉る」

の方も、やはり、詞に遙かに多い。

そして、これら「――奉る」「――聞ゆ」の兩補助動詞の接續し得る、上にくる動詞の色分けも、その現れ方をみると、源氏物語に準じてゐると考へていいやうである。大體、動作を現す動詞は、「――奉る」で接續し、心のはたらきを現す動詞は、「――聞ゆ」である。併し、「――奉る」「――聞ゆ」に兩用されたものとして、「思ひ、忘れ、賴み、訪らひ、恨み、語らひ、知り、恥ぢ、見、習はし、かしづき、教へ、」が、あげられる。これらを、源氏物語に現れた色分けで考へると、「思ひ、忘れ、賴み、教へ、訪らひ、恨み、語らひ、知り、恥ぢ」は、「――聞ゆ」に屬するもの、「見」は、「――奉る」に屬するもの、その他はやはり、兩用されてゐる。

これらの例外を、實際の用例に當つてみる。「思ひ――」といふ言葉は、「奉る」に6例、（詞のみ）、「――聞ゆ」に30例（中、詞27、地3）と、源氏物語のやうに、「――聞ゆ」への定着は、やゝ稀薄であるが、

いでや、子ども二十人にかゝりてもて侍れど、そこをば懷といふばかりに生し立て奉りしかば、いつしかも人々しくなり、面だたしき目をも見給へむとこそ思ひ奉りしか（藏開（下）209 7）

は、「つとめて、內藏頭の君を御使にて、おとゞの御文」といふ、男の、儀式張つた時の詞である。又、

「父宮の思ひ奉れ給へば、まろも」とて取りて、殿上口に立てる侍の人に取らせつ、（藏開（下）117 4）

は、宰相中將の君の御子、宮はた、

「たゞ〳〵しう誰か然は思ひ奉らむ。學士こそは、明暮參りて仕うまつらめ。」（樓の上（下）689 6）

は、正賴

「などて其をば思ひ奉るぞ。見奉らむとや」といへば、「よし」と言ふ。（藏開（中）125 -1）

は、仲忠、と何れも男の詞である。又、

「それな思ほしそ。秀英、主の御顧みを忘れ奉るべきかな。」（田鶴の村鳥、724 -4）

は、藤英

……行くさき、自らよりはじめて、男女子どもまで、たのみ奉り給へれば、このなか君にこそは」（國讓（上）304 7）

は、祐澄と、男の詞である。

これに對し、「――聞ゆ」の方は、「見聞ゆ」一例を數へるが、これは

思ふやうに物したまはずとも、それにつけてこそ、いとゞかの勝れたる様は、見聞え給はめ、（樓の上　602-5）

と、俊蔭女の、女の詞である。

そして、「――聞ゆ」の例外一例に對して、「奉る」の方は、17例である。これは、宇津保物語の作者が、漢文を作ることに習熟した男子であつた事にも原因して、口語性の強い「――聞ゆ」は餘り使用しなかつたのだと思はれる。そして、「――奉る」の例外が、大部分詞に現れた事は、人と人との對話の文章では、どうしても敬意を示す言葉を使ふ必要があり、それが從來の、「――奉る」を接續せしめてゐた、慣用的な用法の範圍を破つて、「思ひ奉る」といつた用法をも生じる事になつたのであらう。更に、この現れ方をよくみると、地の文に於いて現れた「――奉る」は、「始め奉り」「仕う奉り」「入れ奉り」といつた慣用的な、二語の結合の比較的微密なものに比べ、詞の方は、「見え奉り」「教へ奉り」といつた、自動詞的といふべきか、對象をはつきり限定しない言葉に多い様である。[註1]

註1　「教へ奉り」は、源氏物語に於いては、「教へ聞ゆ」と、「――聞ゆ」の接續する代表的な言葉の一つとなつてゐる。

三

以上、謙讓語の補助動詞「――聞ゆ」は、竹取物語あたりより、そろ〳〵現れはじめ、これと同時に、從來、「――奉る」を接續せしめてゐた動詞の範圍が、敬語意識の發達と共に擴がりつゝあつて、「――奉る」「――聞ゆ」共に、上にくる動詞は兩用される、混亂した狀態を示す事になる。併し、口頭語の、しかも女性の言葉として發生した、「――聞ゆ」の方は、自然、從來「――奉る」が接續してゐた以外の、情緒的な、心情のはたらきの表現に參與する動詞に限られ、爰に、平安朝時代に最も發展した、心の微妙な表現にあづかる言葉と結合して、「――聞ゆ」といふ形は、源氏物語に於いて、極めて大膽に使用され、あのすばらしい文様をくりひろげる、大きな力をなしたのではなかつたらうか。

今までの考察に於いて、ほゞお察し願へたと思ふが、大體以上のやうな徑路で、源氏物語に於いては、「――奉る」と、「――聞ゆ」は、上にくる動詞の内容を異にする、と考へたい。前者は、從來より用ひられた、動作性の、對象をはつきり限定する言葉である。後者は、心情のは

たらきの表現に參與する言葉や、王朝時代の雅びやかな雰圍氣から、自由自在につくられた、女性語である。

そして、この兩者の差別に、例外が生じた時は、それは偶然の事もあらうが、多くは、「――聞ゆ」と「――奉る」兩語の、ニュアンスの相違をよく考へての上の、特別の效果を出す爲の、例外であると考へたいのである。卽ち、詞、それも特に女性の詞、は、「――聞ゆ」が多く、地の文、それも、舞臺で演ぜられ得る、人の動作の緩漫な、横に擴がりをもつた地の文ではなく、時の流れを說明するやうな、敍述的な地の文は、特に、「――奉る」であつたと考へたい。

使ひ分けの大體を示すと次の如くなる。

1 複合語に接續する場合は、直接「――奉る」「――聞ゆ」のつく言葉でなく更にその上の動詞の性質に引かれる事がある。

諫め返し聞ゆ　（若菜上　163-3）

「返し」には、「――奉る」が接續するのが、大部分であるが、上の「諫め」に引かれ、「――聞ゆ」が接續したと考へたい。その他

思ひ捻て聞ゆ　（宿木　94 5）

思ひ貶し聞ゆ　（常夏　42 4）

ゆづりおき聞ゆ　（若菜上151 6）

愁へかけ聞ゆ　（早蕨　66 8）

聞き放ち奉る　（若菜上156-6）等、

2 餘りつゞいて、「――聞ゆ」或は、「――奉る」が、つゞく時は、一方を、他方にかへる。

若き人はいと仄かに見奉りて、賞で聞えてすゞろに戀ひ奉るに（東屋　166-1）

「賞で聞ゆ、戀ひ奉る」では、餘り「――聞ゆ」がつゞく故、一方を他にかへて、文章の變化をはかつたと思はれる。[註1]

親と聞えながらも、年頃の御心を知り聞えず、馴れ奉らましかば、恥かしき事やあらまし（篝火　53 6）等、

3 「――聞ゆ」は、詞や心に多い。

年頃辛きにも託ちつべかりし程だに、外樣の心もなくて過してしを、生憎に今更に立ち返り、俄に物をや思はせ聞えむ。（若菜上155-1）

「思はせ聞ゆ」は、「――せ」の上の「思は」に引かれたとも考へられるが、夕霧の心の部分である。

中將、いかで我と知られ聞えじと思ひて、物もいはず……（紅葉賀　157-3）

頭中將の心、

さもや渡し聞えてましなど思へど（宿木　99-2）

薫の心

以上心の部分である。

人の見奉り知らぬ事を、いとよう見聞えたるを、もし似つかはしく、さもや思しよらば……（椎本　270-6）

上の、「見奉る」に對する。變化とも考へられるが、薫の詞である。

4

「――聞ゆ」は、敬意の輕い場合に多い。

女君こそ何心なく幼くおはすれど、男は、さこそ物げなき程と見聞ゆれ、おほけなく如何なる御中らひにかありけむ（乙女　164-4）

この年代の、夕霧に對しては、敬語は非常に簡略である。

今は又見ゆづる人もなくて、親心にかしづき立てゝ見聞え給ふ。（總角　14-10）

宇治の大君から、妹の中君といふ目下に對する關係

5

「――奉る」は地の文に多い。

若きは心に染めてめでたしと思ひ奉る（總角　56-5）

女君の御前に出で來て、いみじう賞で奉れば、田舍びたると思して笑ひ給ふ（東屋　144-5）

若き人々はのぞきてめで奉る。（椎本　272-8）

6

而もこれらの例は、何れも、宇治の女房達――→薫、浮舟の母――→宇治の中君と、身分の隔りが大きく、かやうな時は、なほ更、「――奉る」を使ふ傾向がある。

又、特に、「――奉る」は、説明的な地の文には多い。源氏物語に於いて、「――聞ゆ」「――奉る」に、ほぼ兩用されてゐる動詞とし

て、「かしづき、後れ、後見、傳へ、留め、具し」がある。これらが、「――聞ゆ」を接續せしめる時は、女の詞に多い。反對に、「――奉る」の場合は、

三の君、二郎君は、東の御殿にぞ、取り分きかしづき奉り給ふ。（夕霧　156-2）

と、說明的な地の文である。

7　前後の言葉や、全體の雰圍氣に左右される。

右大將殿を初め聞えて、（少女　158）

「始め奉り」の上にくる名詞は、帝、中宮等、最高の高貴の人々であつた。この場合は、「右大將」と、身分が低い故の、使ひ分けとみたい。

この頃明暮思ひ出で奉れば、仄めきもやおはすらむ（總角467）

は、心の部分であるが、宇治の大君が死んだ父、八宮の事を考へる時である。神や死者に對しては、改まつた物いひをしたやうで、「――奉る」が多く使はれる。

8　四段活用の動詞には、「――聞ゆ」を接續せしめ、下二段の動詞には、「――奉る」が多い。

迎は、「迎ひ聞ゆ」。「迎へ奉る」

入は、「入り聞ゆ」。「入れ奉る」

隱は、「かくし聞ゆ」。「かくれ奉る」

渡は、「わたり聞ゆ」。「わたし奉る」

9　「――奉る」は、僧侶等、男子の詞に多い。身分の隔りのある、高貴な人に申上げる嚴肅な場合には、「――奉る」が多い。消息文にも多いといふ事になる。

大方に付けては、何れの御子達をも、よそに聞き放ち奉るべきにもあらねど（若菜　156-6）

光源氏より朱雀院への詞、

女はいみじく愛で奉りぬべくなむ。（手習 289-5）

紀伊守より小野の妹尼への詞、「愛で奉る」の對象は、薫である。紀伊守程度の身分の人は、「――奉る」を使ふ事が多いやうである。

心ぎたなく、六時の勤めにも、唯御事を心にかけて、蓮の上の露の願をば差おきてなむ念じ奉りし。（若菜上 191-3）

賤しき懐の内にも、辱く思ひ勞き奉りしかど（若菜上 191-10）

共に、明石入道よりの文である。

かやうに、源氏物語になると、その場の雰圍氣、言葉の色彩的、音樂的效果、更に登場人物の内心の微妙な動きにまで立ちいつて、一つ〳〵の言葉を注意深く、書いたと思はれるのである。そして、かやうな表現效果に、「――聞ゆ」といふ、補助動詞も、大きな貢獻をなしたと考へられる。それは、女の詞としての「――聞ゆ」は、文章語としての制約をもたなかつた故に、大變都合がよかつたのであらう。

平安朝時代の文化の擔當者が、多く、女性であつた事を考へる時、それらの女性によつて物された、物語の文章が、こんな口語性の強い女房詞に多くを負つてゐる事を思ふと、甚だ興味深い。そして、受領や僧侶や學者の詞に、「――奉る」が多かつた事は、次代の文化の擔當者が、彼等に於いてなされ、彼等の物したものと考へ併せて、又大變興味深いのである。

なほ、平安末期の假名物語、狹衣物語や、榮華物語に於いても、源氏物語に於いて一應立てられた、「――奉る」と「――聞ゆ」の接續する動詞の差別といふ事は踏襲されてゐるやうである。

註1　これと反對に、宇津保に於いては、一つの言葉が出ると、これに引かれて、同じ言葉が連續する事が多く、甚だ稚拙と思はれる。

……もとめ出奉らんにおはしまさずば、首をも奉らん」と申しければ暇給びて、皆十人二十人と分れて、昨夜の道を求め奉る。兵衞佐御叔父の中將、又他人々もすべて三十人ばかり連れて、先づおはしまいたる方を、賀茂の御社まで、願を立てて求め奉るに、三條京極の辻に立ち給へり。（俊蔭 38）

（昭和二七・一〇）